

サラーム

平和



食料パッケージ

猛暑と大雨、新型コロナウイルス感染拡大のお見舞いを申し上げます。

皆様お変わりないでしょうか。変則的ですが、サラーム 120 号をお届けします。

5月から7月には、大変多くの方から支援金のご寄付をいただき、ありがとうございました。

おかげさまで、現地での活動も進んでいますので、ご報告いたします。

ガザ緊急支援



食糧配布

物資配布

5月10日から21日まで続いたイスラエル軍による空爆や砲撃により 260人が死亡（民間人 129人、子ども 66人）、2,200人以上（子ども 685人、女性 480人）が負傷。破壊された建物は 1,255戸、居住不可能になるほど深刻なダメージを受けた建物は 980戸に及びます。国連人道問題調整事務所によると、瓦礫除去は大幅完了したものの、建築資材などは「軍事転用」を理由としてイスラエル側が引き続き搬入制限をしているため、インフラ再建への道のりは非常に厳しく、現在も 8,820人が家を追われ、避難生活を余儀なくされています。



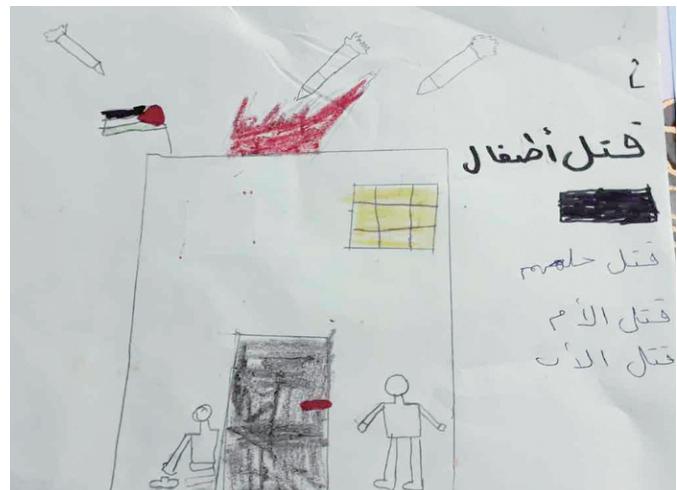
スーパーの引換券を配布

また、ガザ地区内の 8,000世帯（およそ 45,000人）が直ちに食料や生活物資を必要としています。当会では、7月にガザ市と南部ラファ地区の障がい者家庭、女性世帯主家庭など 300世帯に食糧配布を実施しました。

ガザ市では、スーパーマーケットの協力を得て、引換券を持った家族がスーパーで生鮮食品など欲しいものを買えるようにしました。

今後も 1,000世帯以上に食料や生活用品の配布を行います。

トラウマを抱える子どもたち



「子どもたちが殺された。」

「子どもたちの夢が殺された。」

「お母さんが殺された。お父さんが殺された。」

(上の絵に描かれた言葉)

子どもの心理サポートを担当するパートナー団体の心理士、ボドウルさんに話を聞きました。

Gaza

「爆撃から 2 か月以上たっても、ほとんどの子どもが戦争の絵を描きます。頭の中にまだ戦争があるからです。ある子どもは空爆が怖くて外に出られず一人で家にもいられない。」

別の子は暗闇が怖い、親とずっと一緒にいたいと言います。自分と同じ年ごろの子どもが、がれきの下で亡くなった写真やビデオを見たからです。外で、救急車のサイレンや物音がすると、ものすごく怖がり泣く、それは戦争を思い出すからです。

攻撃のあった 11 日間は 24 時間、戦闘機などの音が聞こえました。今回の爆撃はこれまで以上にとても大きな音がしました。すぐ近くに爆弾が落ちたと思ったら、結構離れていたこともあります。私自身も真夜中に「爆撃の標的になっている」とイスラエル軍から通告があった」と隣の人から言われ、手あたり次第に物をかき集め、直ぐに子どもを連れて外に出ました。一晩中空爆や爆撃機の音が響き、どこにも安全な場所はないのです。どれだけの恐怖か、想像できますか。朝まで外で待ちました。幸い爆撃はありませんでした。しかし、こうした偽情報が毎日あちこちにばらまかれ、私たちを恐怖と絶望に陥れたのです。

顔色が悪い、指を口に入れる、爪を噛む、夜眠れない、一言も話さない、夜尿、悪夢などの複数の症状を出している子どもがたくさんいます。また、家族や友達に暴力をふるう、重度の場合は自傷行為も見られます。



ストレスやトラウマを抱える子どもたちには、グループでの活動と個別のカウンセリングを行っています。絵を描く、工作をする、風船ゲーム、椅子取りゲーム、かくれんぼなど楽しいことをして、エネルギーを開放します。

また自分の感情を話すなどの活動をして、怖いのは自分一人ではないと理解してもらいます。そして呼吸法を教えたりして、怒りや負の感情を自分でコントロールすることも教えています。」



左：サエル君 右：ハビバちゃん

障がいのある子どもたち支援

福祉システムの不足、医薬品などの不足、コロナ禍によるリハビリサービスの減少など、ガザの障がい者には、十分な支援がありません。今回の爆撃とその後の混乱の中で、その生活はますます困難になっています。

14 歳のサエル君（上写真左）は、2014 年の戦争で母親と 4 人の兄弟姉妹を失い、自身も右ひざから下を切断しました。その後、当会の提供するリハビリの効果が出て、松葉杖で歩けるようになり、中学校にも通えるようになっていました。しかし 5 月の爆撃で、14 年の戦争のフラッシュバックが起こり、話をしなくなり、通学もできなくなりました。また戦争中に家から避難する途中で杖も破損してしまいました。サエル君には、継続した心理サポートとリハビリ、補装具の提供を予定しています。

2 歳のハビバちゃん（上写真右）は、ダウン症に加えて四肢の筋力が弱く、まだ一人で歩けないため、リハビリ支援を続けています。父親は失業中で、家には 8 人の兄弟と重い知的障がいのある父親の妹がいます。お母さんはこんな風に語りました。

「いつ戦争が終わるのかわからず、8 人の子どもと障がいのある家族を連れて逃げる場所もなく、子どもたちの前で恐怖を取り繕うこともできませんでした。また障がいのある家族に、何が起きているのかを説明することもできませんでした。家は壊れませんでしたが、心は壊れました。

戦争が終わったら、今度は日々の食べ物をどうやって確保できるかに心を痛めています。もうツケで買うことはできません。しばらく野菜も買えていませんでした。そんな時に日本の食糧支援を受けることができて、どれだけ嬉しかったか。日本の皆様に心からのお礼を伝えてください。またどうぞ私たちを見放さないでください。」

ガザでは、障がいのある子どもたちを中心とした心理サポートを開始しています。また、9 月からはリハビリの提供と補装具の提供も開始します。